

蚊柱理論

渡辺 努

経済学にはミクロ経済学とマクロ経済学という分野がある。ミクロは物事を徹視的に見るということであり、個々の企業や個々の商品を題材とする。これに対してマクロは巨視的であり、日本経済や世界経済という大きな括りで経済をとらえる。

しかし、とおり一遍の説明では学生は納得しない。日本経済は多くの企業の集合なのだから個々の企業を理解すれば日本経済は理解できるのではないか。もつと言えば、ある企業というのはその企業が生産・販売する多くの商品の集合体なのだから、個々の商品をよく調べればそれで企業は理解でき、最終的には日本経済も理解できるのではないか。毎年出て来る定番の質問だ。

マクロ経済学を専門分野として掲げる筆者にと

ってこの質問は死活問題だ。ミクロさえしつかりわかれば、マクロは不要ということになってしまふからだ。実際、マクロ経済学者の中にはミクロだけ分かれば十分という考えの持ち主も少なくない。しかし、筆者はこれには強い違和感がある。ある企業の製造している商品がすべて同質であれば、ひとつの商品がもつ性質を相似拡大することでその企業の性質がわかるだろう。さらにすべての企業が同質であれば、相似拡大で日本経済を理解できるだろう。しかし実際には商品は同じではない。企業も多種多様だ。相似拡大でマクロを理解することは不可能だ。

ミクロの積み重ねではマクロを理解できないも一つ理由は、各商品や各企業は互いに関係を

もっているということだ。このことを巧みに説明したのは岩井克人氏の蚊柱理論である。蚊柱とは夏の水辺などで遭遇する蚊の群れである。ググってみると、確かに蚊の群れが黒々とした柱を成している写真がたくさんある。

遠くから見ると、蚊柱は柱というひとつの物体に見える。しかしその柱に近づくと、柱という物体が存在するわけではなく、見えるのは蚊の一匹一匹である。蚊がミクロで柱がマクロだ。

一匹の蚊の飛び方を研究して完全に理解したとしても、蚊柱を理解したことにはならない。多くの蚊が互いに距離を保ち蚊柱を構成する仕組み、つまり集団としての蚊の振る舞いを理解しなければ蚊柱を理解したことはない。もう一歩進んで、蚊柱が蚊の集団であることをいったん忘れて、あたかも柱というひとつの物体であるかのように考え、その柱がどのように出現し移動し消えるかを研究することも考えられる。これがマクロ経済学だ。

蚊柱理論は物価にも適用できる。個々の商品が蚊で物価は蚊柱だ。蚊柱理論の重要なポイント、個々の蚊は自由奔放にあちこち飛び回っているのに全体としては調和があり、柱を構成していると

いうところにある。つまり、個は動的だが全体は安定している。

各国の中央銀行が追い求める物価安定もそれと同じだ。個々の商品の価格は、それを生産する個々の企業やそれを消費する個々の消費者の事情を反映して時々刻々変化するが、全体としての物価は安定している。これが活力ある経済の下で実現される物価安定の理想の姿だ。

翻って我が国の物価を見ると、消費者物価は、ここ数年、前年比ほぼゼロであり、マクロの物価は安定だ。デフレは終わったという楽観的な声も聞かれる。しかし、ミクロの価格には大きな問題が残っている。長期にわたるデフレが原因で、消費者は価格上昇を極端に嫌い、企業は顧客の離反を恐れて価格を動かさない。消費者物価統計で見ると、完全に動きを止めてしまった商品が全体の半数を占める。

蚊が動きを止めれば当然、蚊の群れも止まる。しかしそれは蚊の死骸の堆積に過ぎず、蚊柱ではない。全体としての物価の安定を崩すことなく個々の商品の価格のダイナミズムをいかにして取り戻すか。これが日本経済の課題だ。

東京大学教授